

『たのしくいきましよう』

作…岩本憲嗣

■登場人物

三島龍介(50) 大学講師

尾崎英明(25) フリーター

箕輪彰浩(50) 写真店経営

牧師

○ファミリーレストラン・中

スーツ姿の三島龍介(50)が腕時計をじっとみつめている。

ラフな格好の尾崎英明(25)がやってくる。

尾崎「どうも、遅れちゃいました?」

三島「一時間もだ。それくらいのマナー…」

尾崎「まあまあ、まだ会うの2回目なんすからそんな怒らず大目にみましようよ。あれ?結局俺と三島さんだけなんすか?」

三島「規制が厳しくなったらしい。プロバイダからサイトの閉鎖命令が出てしまった」

尾崎「じゃあ集まりようがないっすね。おっさんとプー太郎の心中、絵づら悪いっすね」

三島「それより宿題はやってきたのか?」

尾崎「ちゃんと本買って勉強したんすよ」

尾崎、胸ポケットからクシャクシャの封筒を取出し三島に渡す。封筒には『遺言書』と書いてある。

三島、封筒を開けて書類に目を通す。

三島「誤字もなくなってるし、書式もまあいいだろう。これなら一応それらしくみえる。そうだなじゃああとはこれだ」

三島、鞆から書類を取出し尾崎に渡す。

書類には『自殺のしおり』とある。

尾崎「大学講師はやること細かいっすね」

三島「そこに死ぬまでに必要なものが明記してある。決行までに用意しときなさい」

尾崎「そうそう、決行っていつにするんすか？三島さんのサイト閉じちゃったならこれ以上仲間増えないっしょ？すぐにでも？」

三島、鞆から手帳を取出し眺める。

三島「そうだな、友引は避けるべきだし、仏滅がいいんだろうか」

尾崎「じゃあ日程は三島さんが決めて下さいね。俺はあれ買っときますよ、備長炭」

三島「練炭だろ。備長炭でも死ねなくはないけど、なんだか体に良さそうじゃないか」

尾崎「細かいことはどうでもいいっすよ」

しおりを眺める尾崎。

尾崎「あ、写真どうします？遺影の写真」

三島「遺影の？」

尾崎「あれって家族が選ぶんすかね、人生楽しくないから死んだ連中が遺影だと笑顔だったりするっしょ、俺それ嫌だな」

三島「そうか……確かにそうだな。笑顔の写真じゃ自殺してまで伝えたかったものが曖昧になる、……よし、撮りに行こう」

尾崎「え？」

○ 東関東自動車道

古い軽自動車があった一台走っている。

○ 軽自動車・車内

三島が運転をしている。助手席に尾崎。

尾崎「別にインスタント写真でいいのに」

三島「私の学生時代の友人に写真屋がいるんだ。死ぬ前に一度会いたかった。丁度いい」

尾崎「で、おっさんと茨城までドライブ？にしてもこのオンボロカー……。他に車ないんすか？三島さん大家族なんでしょ？こんなんじゃ家族乗り切らないでしょ？」

三島「別に大家族じゃない。妻と娘が二人いるだけ……だった」

尾崎「ああゴメンナサイ。このネタ触れちゃいけないんすね」

三島「……………」

尾崎「ほらすぐに暗くなる。仕方ないでしょ浮気ぐらい誰だってするでしょ？」

三島「私はそんな裏切る真似しない」

尾崎「三島さんは三島さん、奥さんは奥さん」

三島「間違ってる。家族揃ってあんな男に入れ込む事ないだろ」

尾崎「え？奥さんだけじゃなくて娘さんまでそいつにハマっちゃってるの？」

三島「全く理解できない。私には許せない」

尾崎「あちゃー、死んでも化けてでちゃ駄目っすよ、益々嫌われちゃう」

三島「私はそんな人間じゃない！！」

三島、尾崎の方を向き怒鳴りつける。

車が大きくスリップする。慌てて急ブレーキをかける三島。車が止まる。

尾崎「ちよ、人を殺す気っすか!？」

三島「す、すまない」

尾崎「あ。ねえ三島さん。あれ行きませんか？」

尾崎が窓の外を指差す。

そこにはろくろの絵の描かれた陶芸教室の看板。

○ 陶芸教室工房・中

並んでろくろを回す三島と尾崎。

尾崎「丁度いいっしょ？これを自分の骨壺にしましょうよ」

三島「なかなか難しいな」

尾崎「なんだかゴーストみたいっすね」

三島「ゴースト？」

尾崎「デミムーアっすよ。知らないんすか？」

三島「知らない」

尾崎「後ろからリチャードギアがこう」

尾崎、三島の背後にまわりしがみつく。

三島「な、何をする」

尾崎「はぁ？三島さんエロエロっすね、なんちゅうもんに骨詰める気っすか？」

三島のろくろの上では女性の体のような曲線の壺がまわっている。

○ 軽自動車・車内

運転する三島。助手席に尾崎。

三島「別に私はそういう気で……」

尾崎「別にいいですよ、三島さんが変態だろうとなんだらうと。でも焼き上がり楽しみつすね、来週つすよ来週」

三島「え？あ、ああ。……その君は本当に楽しそうだな。本当に死にたいのか？」

尾崎「え？まあ多分。ほら、特に何して生きてたいってのもないし、死のうかなって」

三島「はあ。理解に苦しむ」

尾崎「三島さん。墓ってどうなるんすかね？」

三島「そうか、考えてなかった」

尾崎「でしょ？変な所埋められたくないっすよね。俺また提案してもいいっすか？」

三島「あ、ああどうぞ」

尾崎「あそこ綺麗っすよね」

尾崎が窓の外を指差す。

日の当たる丘に教会と墓地がある。

○ 教会・中

スタンドグラスの明かりに照らされて三島と尾崎が立っている。

牧師が二人に一生懸命説法している。

大あくびする尾崎。

時折時計をみる三島。

○ 教会・墓地（夕方）

並んで煙草を吸っている三島と尾崎。

三島「これから死ぬ人間が命の尊さを教えられてどうするんだ」

尾崎「ね。俺今更気づきましたよ」

三島「自殺やめるのか？」

尾崎「そうじゃなくて、ウチ真言宗なんすよ。真言宗ってキリスト教じゃ……」

三島「当り前だ」

尾崎「やっぱり？俺馬鹿っすね。ははは」

三島「楽しいか？私にはわからない」

尾崎「わかるうとするからつまんないすよ。楽しいときはよくわかんないけど楽しい。簡単でしょ？さ、さっさと行きましょ」

尾崎、ポケット灰皿を取出し三島に差し出す。

○箕輪写真館・中(夜)

三島と尾崎が店内を見回している。

箕輪彰浩(50)が奥の部屋から来る。

箕輪「遅いよ龍ちゃん。東京からここまでどれだけかかってるの？」

三島「ちよつと寄り道を……変わらないな」

箕輪「龍ちゃんだつて。でもどうしたの急に写真撮るなんて？わかった、奥さんと別れて見合いでもするのか？」

三島「……」

尾崎「あちゃー、おっさん間悪すぎだよ……」

箕輪「今スタジオの準備するからね」

○箕輪写真館・スタジオ

椅子に座らされている三島。

カメラを構えた箕輪が写真を撮る。

三島を見てくすくす笑う尾崎。

三島「何がおかしい」

尾崎「三島さん必死に不幸な顔作ろうとしてるでしょ？」

箕輪「駄目だよ、それじゃ女寄ってこないよ」

尾崎「もつと自然にさ、辛いこと思い出して」

三島「辛いこと……」

三島、腕を組んで過去を思い出す。

次第に涙ぐむ三島。

尾崎「泣くことないっしょ泣くこと」

三島「泣いてない!!」

口論する尾崎と三島。

気にせずシャッターを切り続ける箕輪。

○箕輪写真館・中(夜)

撮った写真をテーブルに並べて眺めている三島と尾崎。

三島「客観的に見てどれが一番いい？」

尾崎「どれも駄目でしょこれ」

三島「どうして？」

尾崎「最初に言ったじゃないっすか、これが不幸な顔にみえます？」

尾崎が写真を一枚つきだす。

そこにはぎこちない表情の三島。

尾崎「全然暗くみえないでしょ？」

三島「……確かに、なんでだ？」

尾崎「撮り直します？」

三島「いや、いい。何度撮っても同じだろ」

尾崎「え？」

三島「楽しいからこんな顔なんだろ」

尾崎「は？三島さん？何が楽しいんすか？」

三島「よくわからない。わからないけど楽しいものは楽しいんだ」

三島、写真を皺くちやに丸めて捨てる。皺のせいで笑ってみえる三島の写真。

【終】

※ご利用上の注意※

・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。

・ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。

・本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール報頂けますようお願い致します。

・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。

・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

・仲間内で集まつての練習でのご利用。

・Skype などを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。

・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)